

京都御所泉殿地震殿の歴史と地震防災

川崎 一朗*・高橋 昌明**・北原 糸子*・岡田 篤正*・鈴木 祥之*
 中西 一郎***・石橋 克彦**

I. はじめに

京都御所は、貴族社会の頂点とも言え、かつ150年以上前の歴史を保存している希有の建造物である。我々は、京都における防災意識の歴史の変遷について学ぶことを遠い目標として、2010年7月2日午後、京都御所における天皇と皇后の避難生活のための建屋である泉殿と地震殿を視察させて頂いた。

視察においては、地震防災という視点で既に歴史的存在になっている2つの建造物を確認させて頂くと共に、地震防災の意識が必ずしも明確でない時代に、御所、公家、大名屋敷などにある地震殿などの避難生活のための建屋がどのような目的で造営されたのか、どのような構造をしているのかなどについて、現地を見ながら議論を行うことができた。ここには、その要点を手短かに書き留めておきたい。

まず、文献においてしばしば混乱があるように見えるので、次の点を明確にしておきたい。京都御所内で避難生活のための建屋としては以下の2建造物がある。

(1) 天皇御常御殿の泉殿

災害時における天皇の避難生活の場。現在の建物は、1830年(文政13年)京都大地震後、天皇の御常御殿近くの内庭に、天皇の避難生活の場として建てられ、1854年(嘉永七年)の大火では類焼を免れ、1855年(安政二年)の内裏造営で修理を加えて、現在まで引継がれている。第3図の引用元の『京都御所 大宮・仙洞御所』¹⁾(京都新聞出版センター、2004)を含め、しばしば、この泉殿が地震殿とされている。

(2) 皇后宮常御殿の地震殿

災害時における皇后の避難生活の場。1855年(安政元年)の内裏造営の際、皇后御殿の内庭に、泉殿をひとまわり小さくしたものが建てられた。

II. 江戸時代以降の御所再建の歴史

泉殿と地震殿の在り方は、御所の造営の歴史に規定されているので、まず、江戸時代以降の御所造営の歴史を簡条書きにしておく。

(1) 慶長度造営(1611年~1614年、慶長十六年~十九年)

徳川の治世になったことを示す徳川家による新規造営。

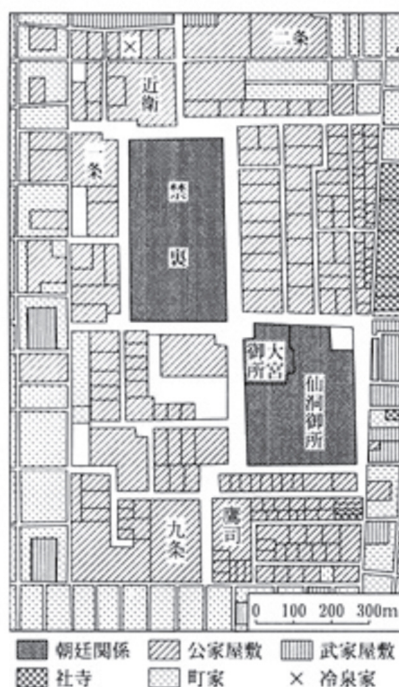
(2) 元和度造営(1619年、元和五年)

徳川和子(東福門院)の入内のために拡張された。

(3) 寛永度造営(1641年~1642年、寛永十八年~十九年)

徳川家の血をひく明正女帝の即位に伴う新規造営。造営の総奉行が小堀遠州であったため、武家風の趣向が濃厚にでていると言われる。

これ以降の造営は、火災焼失に伴う再興である。



第1図 幕末期の京都御所と公家町の配置図。平岡・野間(2006)²⁾による。

* 立命館大学歴史都市防災研究センター

** 神戸大学名誉教授

*** 京都大学理学研究科

(4) 承応度造営(1654年～1655年、承応三年～明暦元年)

1653年(承応二年)の火災によって内裏が炎上したことに伴う再興。

(5) 寛文度造営(1662年～1663年、寛文二年～三年)

1661年(万治四年)の大火に伴う再興。

(6) 延宝度造営(1675年、延宝三年)

1673年(寛文十三年)の大火に伴う再興。

(7) 宝永度造営(1708年～1709年、宝永五年～六年)

1708年(宝永五年)の大火に伴う再興。御所を含む公家町(現在の京都御苑の区域)を取り巻く今出川通、寺町通、丸太町通、烏丸通の道幅を広げ、公家町の中には公家みの居住を許し、民家はすべて鴨川の東や仁王門付近に移転させて、現在の京都御苑とはほぼ同じ区域を公家町とした(第1図参照)。

(8) 寛政度造営(1790、寛政二年)

1788年(天明八年)の天明の大火では、御所と公家町も含めて、京都の町は焼き尽くされた。第2図は焼失地域を示す。

この造営において、御所は北に拡大され、皇后宮御所のスペースが作られた。内裏の建物平面は、裏松固禪の『大内裏図考証』に基づき、平安朝の古制に戻して再建

された。

(9) 安政度造営

1854年(嘉永七年)の大火の後、1855年(安政二年)、寛政度造営に復することを目指して再興された。

なお、安政東海地震と南海地震が起こったのは、実は、嘉永七年11月4日と5日で、直後の27日に安政と改元された。そのため、この地震は嘉永東海地震・南海地震と呼ぶべきではないかという意見もあるが、慣習に従って安政東海地震・南海地震と呼びならわされてきている。

Ⅲ. 京都御所の区分

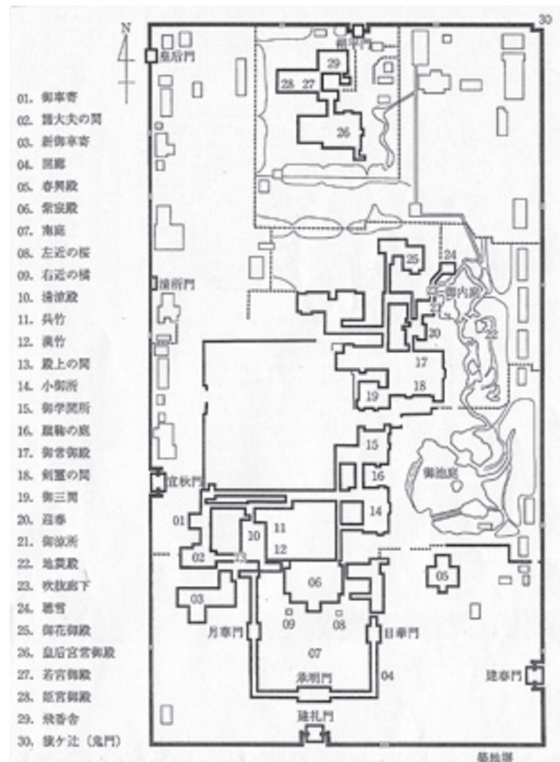
京都御所は、表向き御殿群と奥向き御殿群に大きく2つの部分に分けることができる。南の部分には『大内裏図考証』に基づいた古制が用いられ、奥に(北に)進むにつれて近世的な色彩が強くなる。

(1) 表向き御殿群。御所の南半分の第3図の01から16までの部分。次の2つに分けることができる。

(1-1) 寛政度造営(1790年)において、平安朝の古制に戻して再建された主要建造物(第3図の01から13)。嘉永の大火(1854年)で消失したが、翌年再興された。



第2図 赤線は天明の大火による焼失地域を示す。立命館大学歴史都市防災研究センターホームページによる。



第3図 現在の御所の配置図。22番は、ここでは地震殿となっているが、本報告書の本文では通用の泉殿の名称を使用した。京都新聞出版センター¹⁾(2004)による。

現在でも、平安朝の御所の雰囲気醸し出している。

(1-2) 内裏北東端の小御所 (14) と御学問所 (15)。

ともに平安京内裏にはない。小御所は鎌倉時代に起源をもち、清涼殿の北に定まったのは室町時代、幕末の王政復古の号令が発せられた場所として著名。1954年に火災で焼失し、1958年に再建された。御学問所は慶長度造営で新しく建てられた御殿。

(2) 奥向き御殿群。天皇と皇后の日常生活の場。次の2つに分けることができる。

(2-1) 御常御殿を中心とする南半分の内裏 (17 から 25)。天皇の日常生活の場。

(2-2) 皇后宮御常御殿を中心とする北半分の皇后宮御所 (26 から 29)。皇后の日常生活の場。

IV. 泉殿と地震殿の歴史

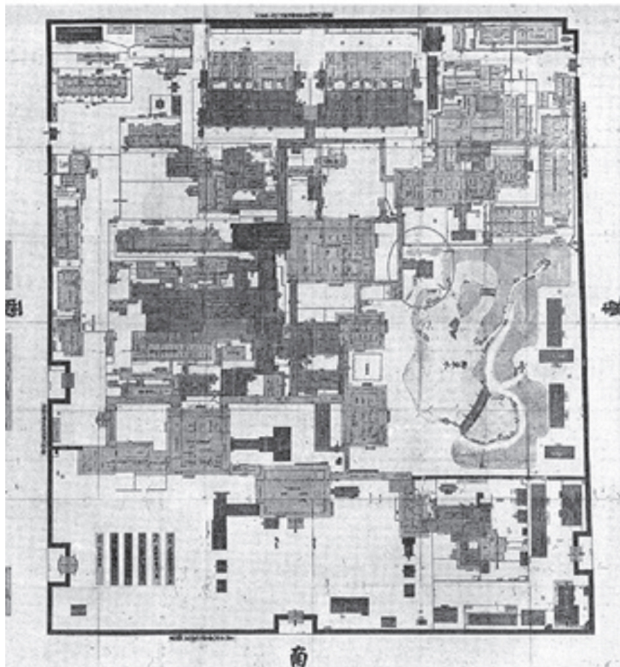
泉殿は、内裏の中核をなす御常御殿の御内庭の中にあり、庭木と流水に囲まれた環境にある。

泉殿は、1673年(寛文十三年)寛文の大火の後の「延宝度内裏指図」(1675年、延宝三年)に記載されてい

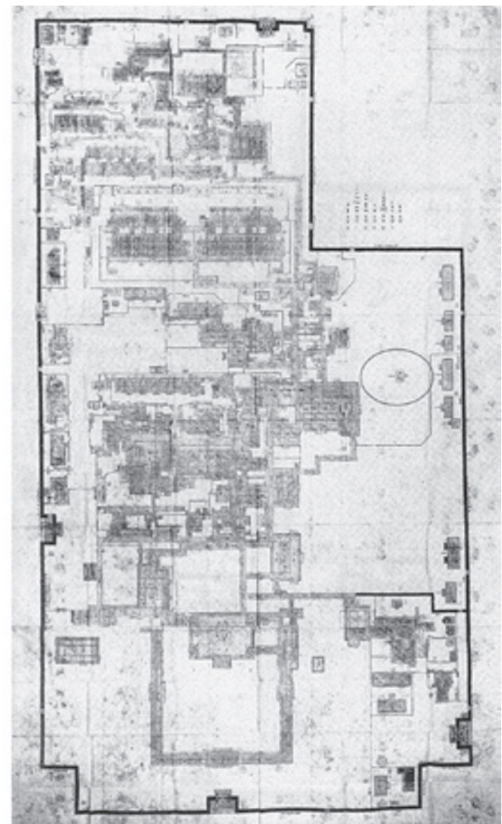
いが、1703年(元禄十六年)の「延宝度内裏指図貼絵図」(第4図)、『中井家文書の研究第三巻』³⁾(平井聖、1978)の図版177)には記載されているので、1675年と1703年の間に建てられたと推測できる。ただし、場所は、現在の泉殿よりやや南側である。1703年に相模湾で起こった海溝型巨大地震である元禄地震の江戸周辺の被災の状況から、地震に対する備えの必要性が認識されたのであろうか。「延宝度内裏指図貼絵図」からは、御常御殿からの廊下が、泉殿の八畳の間に繋がっていたことが分かる。

ところが、「宝永度内裏指図」(1709年、宝永六年)では、泉殿は再び消えている。1703年(元禄十六年)に貼絵図が作られたあと駿河トラフから南海トラフで宝永の巨大地震(1707年)が起って畿内でも大きな被害が生じたのに、その後の内裏造営で泉殿が消えたのは不思議と言えよう。

齊田(1940)⁵⁾からの孫引きになるが、「月堂見聞集」(本島知辰著)⁶⁾によると、1723年(享保八年)の「禁裏地震御殿図」に泉殿の記載がある。この泉殿は、10畳、6畳、4畳2部屋で、現在の泉殿より一回り大きく、室内は狩



第4図 「延宝度内裏指図貼絵図」(1703年、元禄16年)に、当時の泉殿を示す○を加筆。元図は『中井家文書の研究第三巻』³⁾(平井聖、1978)の図版177)。



第5図 「寛政度内裏指圖書絵図」(1830年、文政13年)に、泉殿を示す○を加筆。この図の泉殿が現存している。元図は『中井家文書の研究第七巻』⁴⁾(平井聖、1982)の図版667)。

野派や土佐派の襖絵で飾られていた。

1788年（天明八年）の大火の時、京都はほとんど丸焼けになった。そのあとの「寛政度内裏指図書絵図」（1790年、寛政二年）（『中井家文書の研究第七巻』⁴）（平井聖、1982）の図版659）にも泉殿はない。

1830年（文政十三年）に京都大地震が起こり、御所は築地塀の一部が崩壊するなどの被害を受けた。そのあとの「寛政度内裏指図書絵図」（第5図）（同図版667）には泉殿が再登場する。京都大地震の後、泉殿が天皇の避難生活のために作られたことが分かる。

1854年（嘉永七年）の大火の時には再び御所のほとんどは焼失した。安政東海地震・南海地震（1854）の後、安政度造営（1855）によって御所の主要建造物は寛政度造営に復することを旨として再興された。泉殿は嘉永の火事（1854年）を免れ、安政東海地震・南海地震でも大きな被害を受けず、安政度造営のときにおける修理の後、今に至っている。

地震殿は皇后宮御常御殿の東側に位置する。「宝永度内裏指図」（1709年、宝永六年）でも、「寛永度内裏指図」（1790年）でも、地震殿は見えないが、安政度造営のときには、泉殿と共に地震殿も造営された。安政東海地震・南海地震（1854年）の影響であろう。

V. 泉殿と地震殿の外観と構造

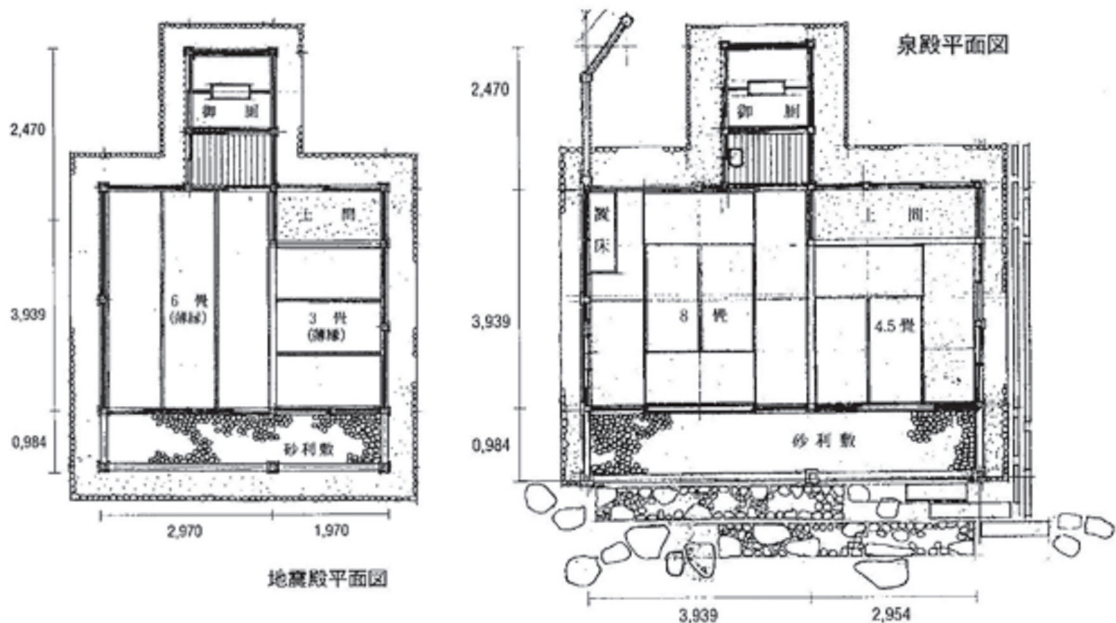
第6図は、堂岡（1995）⁷による、内裏の泉殿と皇后宮御常御殿の地震殿の平面図である。泉殿は木造平屋建て、正面（写真1）を御常御殿に向かって西向きに建っている。主屋は、正面幅ほぼ7m、奥行き4mで、北側に8畳間、南側に4.5畳間と1.5畳分の上間がある。8畳間の北壁には丸窓（写真2）が付いている。8畳間と4.5畳間の前にはほぼ1m幅の砂利敷き（写真2）がある。天井は構造材が露出している（写真6）。8畳間の奥に、幅1.5m、奥行き2.5mの御厠（写真3）が附属している。

地震殿も木造平屋建てで、正面（写真5）を皇后宮御常御殿に向けて（西向き）建っている。主屋は、正面幅ほぼ5m、奥行き4mで、北側に6畳間、南側に3畳間と1畳分の上間があり、正面にはほぼ1m幅の砂利敷きがある。泉殿より一回り小さいがほぼ同じ構造と言えよう。6畳間の奥に、幅1.5m、奥行き2.5mの御厠（写真7）が附属している。

柱は、泉殿は1間間隔、地震殿は0.75間間隔の3寸5分の杉材、側壁はすべて土壁の単純な構造をしており、地震には強い構造と言えよう。

齊田（1940）⁵によると、2室とも、土台に根太（床板を支える横木）を掛け、床を低く作ってある。ただし、今回の視察では、土台を直接見ることはできなかった。

もともと、泉殿も地震殿も、耐震というよりは、天皇



第6図 内裏の泉殿（右）と皇后宮御所の地震殿（左）の平面図。左方が北。堂岡（1995）⁶による。

と皇后の避難生活の場として建造された。構造は簡潔であるが、そのため、かえって、耐震的に強い構造になっているように思われる。

泉殿の御厠（写真4）も地震殿の御厠も、木製四角形

の単純な構造で、取り外して移動可能なものである。避難生活における厠の重要性がよく認識されていたことがしのばれる。



写真1 泉殿の正面からみた全体像。



写真2 泉殿の南西側面と全面の砂利敷。

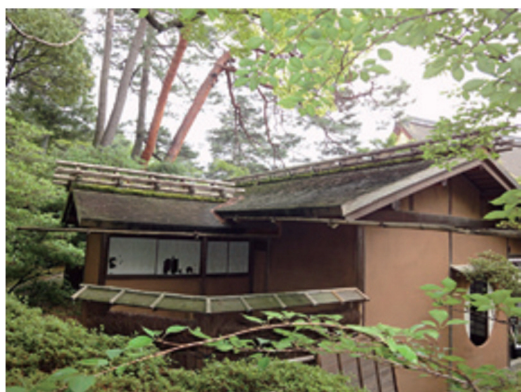


写真3 泉殿の北東側面。



写真4 泉殿の御厠。



写真5 地震殿の前景。



写真6 地震殿の天井



写真7 地震殿の斜背面。突き出ているのは御厠。



写真8 地震殿の御厠から突き出ている樋。

VI. 文化財保護法と京都御所

以後の議論は、泉殿と地震殿に限らず、御所全体に関わる。

明治憲法下の皇室財産は、1947年に公布された国有財産法によって、「皇室用財産」という名称の国有財産になった。1948年改正の国有財産法で、皇居、京都御所、陵墓などの「皇室用財産」が従来通りの皇室の使用となり、その事務は宮内庁が行うことになった。その宮内庁は、「皇室用財産」は国として守るので、文化財保護法による保護は不要という立場をとり続けている。

一方、「顕著な普遍的価値を持つ文化及び自然の遺産は、全人類のための世界遺産の一分として保存しなければならない」という世界遺産の理念にも照らして、京都御所を含む「皇室用財産」を文化財保護法による文化財

指定を受け、世界遺産にも登録すべきではないかという意見もある。

VII. 想定震度

地震防災を考える場合の主要な危険因子は次の2つだと言えよう。

[危険因子1] 京都平野と周辺を走る多くの活断層(第7図)を震源とする内陸型地震

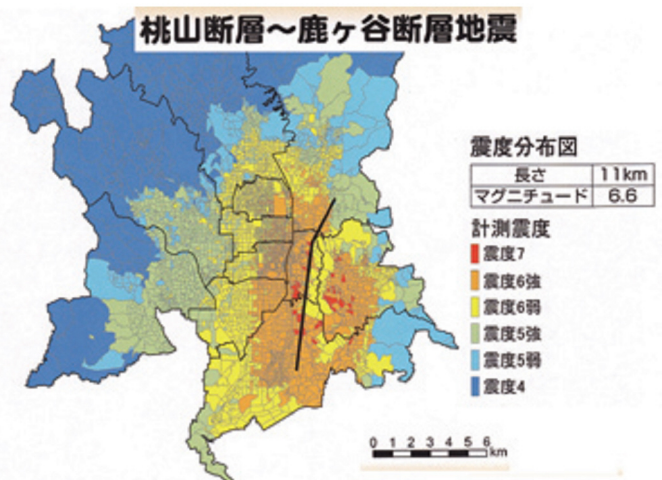
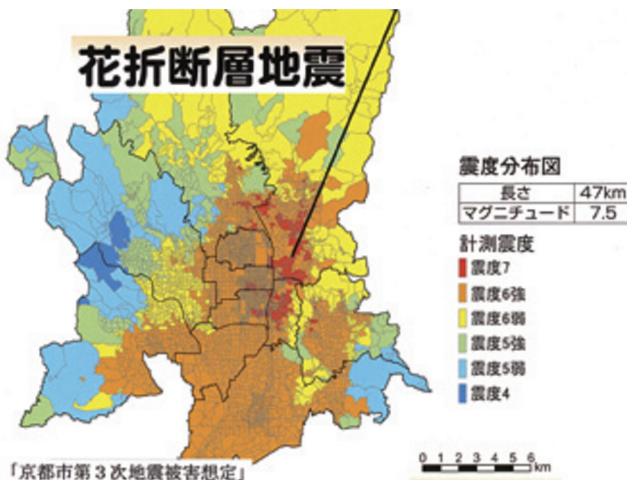
京都市第3次地震被害想定(2004)⁸⁾によれば、もっとも大きな被害が予想されるのは花折断層が震源となる地震(想定マグニチュードは7.5)の時、京都市中心部の震度は6強と想定されている(第8図)。桃山~鹿ヶ谷断層(想定マグニチュードは6.5)の場合にも震度6弱、琵琶湖西岸断層(想定マグニチュードは7.7)の場合は震度6弱である。

[危険因子2] ほぼ30年後までに確実に日本列島を襲う東南海・南海地震地震調査委員会(2010)の長期評価では、2010年の時点で、南海地震の30年発生確率は60%、東南海地震の30年発生確率は60%~70%である。このときの京都盆地中心部の想定震度は5強である。

1995年兵庫県南部地震のときの京都盆地中心部の震度も5であったが、南海・東南海地震の場合は、地震動が数分もの長時間にわたって継続する。震度が同じとしても、1995年兵庫県南部地震のときの京都平野中心部の地震動とは性質がまったく異なると予想される。



第7図 京都盆地と周辺の活断層分布。京都市第3次地震被害想定⁸⁾(2004)の資料の図を修正した。



第8図 花折断層と桃山断層を想定震源とした場合の想定震度分布。京都市第3次地震被害想定⁸⁾(2004)の資料の図を修正した。

VIII. おわりに

泉殿と地震殿を含めて、現在の御所は、1854年（安政元年）安政の東海地震・南海地震のあとに造営され、1944年東南海地震と1946年南海地震を経験した。ただし、この2つの地震は、100年から150年間隔で繰り返してきた東南海地震・南海地震の中ではもっとも小型とされている。次の巨大地震は、1944年東南海地震と1946年南海地震が同時発生した規模の1707年宝永地震型の超巨大地震の可能性が強いと予想されており、1944年東南海地震と1946年南海地震の時よりも一回り強い地震動に襲われるものと思われる。現在の京都御所の建造物は、このような地震動は未経験である。御所で働く人々と観光客をも守ると同時に貴重な文化財である御所を守ることを目指して、耐震診断・耐震補強に進むことが望ましいと思われる。

【付記】 泉殿と地震殿を視察する許可を頂いた宮内庁京都事務所に感謝するとともに、御所内を案内して懇切丁寧に泉殿と地震殿の歴史を説明して頂き、多くの資料を提供して頂いた同所工務課の三橋康男、藤瀬勝彦、管理課の岡本和彦の各氏に深く感謝いたします。

注

- 1) 京都新聞出版センター編『京都新聞創刊125周年記念出版 京都御所 大宮・仙洞御所』、京都新聞出版センター、京都市、2004。
- 2) 平岡昭利・野間晴雄編『近畿I 地図で読む百年 京都・滋賀・奈良・三重』、古今書院、東京都、2006。
- 3) 平井聖編『中井家文書の研究第三巻 内匠寮本図面篇三』、中央公論美術出版、東京都、1978。
- 4) 平井聖編『中井家文書の研究第七巻 内匠寮本図面篇七』、中央公論美術出版、東京都、1982。
- 5) 齊田時太郎「京都御所泉殿及地震殿について」、東京帝国大学地震研究所彙報18(4)、1940、698-700頁。
- 6) 国書刊行会編『月堂見聞集』、近世風俗見聞集第二、国書刊行会、東京都、1913、5頁。
- 7) 堂岡實「京都御所の地震御殿」、普請（京都伝統建築技術協会機関誌）、29、1995、36～40頁。
- 8) 京都市、京都市第3次地震被害想定、京都市、2004。

参考文献

- 冷泉為人「公家町の災害と防災－内裏（仙洞・大宮）御所をめぐる－」、立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラムジョイントワークショップ報告書『歴史災害と都市－京都・東京を中心に－』、2007、21～28頁。
- 立命館大学文化財遺産防災学「ことはじめ」編出版委員会『文化財遺産防災学「ことはじめ」編』、アドスリー、東京都、2008。
- 高橋昌明責任編集『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす 12 洛中洛外京は“花の都”か』、朝日新聞社、1994。